京都高齢者大学校　京響メンバーによる大人の音楽教室

音楽のよろこび

２０２２年7月25日　№43
発行文責　　担当事務局
田中　正恭

梅雨が明けた！と言っても蝉の鳴き声が聞こえてこない･･･そして蚊がほとんどいない･･･この現象は気温が異常に高かった６月末から７月当初のことでした。何かおかしい。やはり地球温暖化の一つのあらわれ？と思ってしまいます。そして、ジワジワとコロナが勢いを増し･･･。

そんな中ですが、今日は一昨年のDVD講座ですばらしい演奏をされた、お三方の生演奏が聴ける日なのです。ヴァイオリン・田村安祐美さん、コントラバス・神吉正さん、ピアノ・佐竹祐介さんの登場です。この楽器の組合せは珍しいと言われたりしますが、DVD収録時に感じたのは、コントラバスをほとんどチェロのように、そして、コントラバスという楽器そのものの落ち着いたすばらしい低音の世界を、私たちに心行くまで味合わせていただける、ピアノ、ヴァイオリンと混然一体となって･･･そんな世界にシビレたのでした。ヴァイオリンの輝かしく美しい音、ピアノのゴージャスな音、今日は音楽家、演奏家であるのはもちろん、何か求道者のようなイメージの３人による音楽芸術を、私達は間近でシャワーを浴びるように聴き、心洗われる時間を過ごせる、そんな期待をもって。。。開演、開講です。

♬　前回　6/20　ヴァイオリンとピアノトリオの世界　♬

松谷さんは大きく２つに分けてお話をされつつ、演奏も聴かせていただきました。

♪一つは「室内楽」の成立の歴史。教会音楽と世俗音楽、当時のヨーロッパ、特にイタリアの王族、貴族の宮廷発祥のムジカ・ダ・カメラ（部屋の音楽）から、今に続く正統的なクラシック音楽の流れを簡潔にお話になり、そこでヴァイオリンの果たした役割に入り、楽器の有様の説明、その素晴らしさの理由を「自然にあるものと厳選し、職人のひらめき、技術の結集がヴァイオリンを作り上げた」とまとめられました。
そしてコレリの室内ソナタの演奏、17世紀後半から18世紀はじめの当時の雰囲気を十分感じさせていただきました。

♪二つ目には、ウィーン古典派を代表するハイドンの果たした役割を演奏で示し、ついでロマン派、フランスを代表するラヴェルの、ただ一曲のピアノトリオのつくりかたの分析を通じ、オーケストラの世界を感じさせるオーケストレーションの天才ラヴェルの工夫やすばらしさを示され至った。ついでショスタコーヴィチの政治的抑圧の中での自らの求める音楽と、体制側から求められる「音楽」づくりの間で苦しみつつも、音楽のあるべき姿を追求していった天才の若き日の作品を,演奏して下さいました。美しかったですね。そして平和を願うフォーレの作品の演奏。ロシアのウクライナ侵攻という問題のさ中、音楽家として何を大切にしていくかをも述べられ、感動的な演奏とお話を終えられました。「ノート」は別紙でご覧ください。

ヴァイオリン　松谷　由美　さん
チェロ　　渡邉　正和　さん
ピアノ　　小林　千恵　さん

すばらしい時間を、ありがとうございました。

～アンケートから～

いつもアンケートにご協力
ありがとうございます。
アンケートは一部抜粋したものも
あります。 ご了承ください。

ヴァイオリンの構造を初めて知りました。表は松、横と裏は楓で、500年前に作られた形は変わっていないとのこと。すごいな･････
音を聴いて小さな楽器なのに音が響き渡り、気持ちの良い音色でした。
音楽のことはほとんど知らなく、3回目ですが、だんだん楽しみが湧き、生演奏はいいなーと思いました。

タララララ～♪で始まるハイドンのジプシー、3人の雰囲気がお互いを尊重しながら、共鳴しながら、暖かくて、やわらかくて、楽しくて、すてきでした。学べて楽しめて、今日とても心地よい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

ピアノトリオは、それぞれの楽器のメロディの掛け合いが楽しかったです（ハイドン）
小さいサイズの実物を使ってのヴァイオリンの構造説明は良かったですが、後ろの方からは見づらいので、図解があるとさらに良いと思います。
ラヴェル、ショスタコーヴィチでは、楽しく、心地よいだけでなく、作曲家の思いが強くこめられ、音に深みや苦悩まで感じられる響きでした。マスク装着のため言葉として聞き取りにくいことがあるので、面倒だと思いますが、できるだけマイクを使ってほしいです。
（星野正幸さま）

とても良かったが、説明が聞き取りにくい部分があり残念。

とても素晴らしい演奏ありがとうございました。室内楽の歴史や、ヴァイオリンのしくみひとつひとつ、曲と作曲家の解説など、とても丁寧でくわしく聞かせていただき勉強になりました。（ただ、私の知識不足もあり、少し難しかったですが･･･）ハイドンの曲では、サロンで聴くような優雅な気分になり、ラヴェルではトリオとは思えない重厚な響きと音の幅に感動しました。ショスタコーヴィチの曲は、美しくも悲しくそして激しくて心の叫びを聞いているようでした。まさに今ロシアのウクライナ侵攻をなげいているように聴こえました。そして最後のアヴェ・マリアは、平和への祈りに思えて涙がでそうになりました。ありがとうございました。（松浦智子さま）

ヴァイオリンについての細かい説明は嬉しかったです。知っていたつもりでも新しい知識を得られました。ソナタについてもお話しいただき、再確認することが出来ました。
音楽の時代での流れを話していただいてからの演奏が、またまた良かったと思います。最後にアヴェ・マリアも聴けて、本当に素敵な時間でした。

様々な楽器を紹介していただいて、感動することができる講座ですが、やはりヴァイオリン・チェロ・ピアノというのは、王道かなと思ってしまいます。ラヴェルの不思議な高揚感は間近で演奏者の方々の動きの大きな演奏を見ることで、倍加されたようでした。
ヴァイオリン・チェロ・ピアノが各々の個性を前面に出して、重奏なトリオの世界に引き込まれました。（外村律子さま）

迫力のある演奏をありがとうございました。いつも「音楽のよろこび」ありがとうございます。ついては、6/20付の挿入写真が不鮮明で残念です。（白飛びでしょうか？）

後ろの窓からの光が入ってしまったようです。申し訳ありません。「音楽のよろこび」は、京都高齢者大学のホームページ
https://kyoto-koudai.jp/
にも掲載されています。そちらの写真の方が印刷したものより少しですが、見やすいかと思いますので、ご覧いただければと思います。（事務局より）

ヴァイオリンとピアノトリオの演奏、初めて聴きました。ラヴェルの曲は少人数にも関わらず、迫力ある演奏を生で聴くことができたことは、本日の最高の喜びです。第１楽章・第３楽章も聴きます。

時代ごとに作風が変わっていくのがよく分かりました。時代が新しくなるほど、演奏者にとっては、大変ですね。その分すごいなー思いました。

松谷さんのお話は歴史的な背景など具体的に話され分かりやすかったです。
ラヴェルのピアノトリオは、ピアノ演奏のダイナミックさに圧倒され感動。

ピアノトリオの講座ありがとうございます。講義の内容を聞きとめようと努力しましたが、よく理解できませんでした。田中さん再度メモをお届けください。
しばらくは、ピアノトリオにはまりそうです。

素晴らしい演奏を聴かせていただき、感動です。いつもの如しヴァイオリン・チェロ・ピアノの演奏と思っていましたが、ラヴァルの曲を聴きびっくり！息つくことも忘れるくらい、聴き惚れました。ソフトな音から力強い音へ、そして弦をつまびく演奏方法など‥心に残りました。心の高揚のまま帰途につきます。ショスタコーヴィッチの演奏は素晴らしい演奏でした。ありがとうございました。

Trio遊羽穂（松谷由美さん　渡邉正和さん　小林千恵さん）から　コンサートのお知らせです。
（弦の音　Ⅵ　～ピアノトリオの愉しみ～）
【日時】2022年8月21日（日）
　　14:00開演（13:15開場）
【場所】学びの里「めいりん」講堂
　　福井県大野市城町9-1
【プログラム】
　ドビュッシー:月の光
　ドビュッシー:亜麻色の髪の乙女　他

♫　音楽に関する文学的成句　♫

Bed ř ich Smetana　ベドルジハ・スメタナ(1824～1884)

◆「音楽は感情のことば、言語は思想のことば、その二つを結合させて、われわれの国民音楽をつくらねば」　黒沼ユリ子「我祖国チェコの大地よ」P.166より

チェコといえば、ドボルジャーク、すばらしいシンフォニー、チェロコンチェルト、美しいヴァイオリンコンチェルトも、民族色あふれるメロディーを胸にしみる楽曲として多数残した大作曲家。その彼が師と仰いだスメタナ‥‥‥
熱烈な民族主義者で、1848年当時、ハプスブルグ帝国支配下のチェコ、フランス二月革命の余波を受けての革命運動に参加、その後、国外での活動を経て1866年、プラハ国民劇場の指揮者となり、同年、オペラ「売られた花嫁」はチェコ国民オペラ最初の傑作。そして、6曲からなる連作交響詩「わが祖国」（その第3曲はよく知られる「モルダウ」チェコ語でヴルタヴァである。）「わが祖国」は、今日の「プラハの春音楽祭」で必ず演奏されるのです。聴覚を失うという不幸にさいなまれる日々の中、弦楽四重奏曲「わが生涯より」などの作品を残すも、1883年、精神錯乱が高じ、翌年没したのでした。

‥‥‥‥もう10年以上前になりますが、田中は私的な旅行でプラハに行きました。有名なモルダウ川にかかる、石造りのカレル橋を渡ったすぐの所に「スメタナの家」という所があり、訪ねたところ、客は私と連れ合いの二人だけ。二階に上がるとスメタナ使用のピアノや楽譜、古い写真が展示されていました。本当に地味な建物でした。品の良いおじいさんが、案内してくれ、「スメタナの作品を聴きますか？何がよいか？モルダウか？」と言われ、私が「弦楽四重奏を」言うと、あの有名な「わが生涯より」の一節が、少し古いけど立派なオーディオ設備から流れたのでした。何か胸がいっぱいになり、礼を言って1階に降り、そこでモルダウのきれいな絵が描かれたピアノの楽譜を買ったのです。これは大切にして家にあります。そしてそこからすぐ近くの広場が1968年に当時のチェコの民主化運動「プラハの春」をつぶすためにソ連、ワルシャワ条約機構の軍の戦車が入って来た時、プラハ市民が素手で立ち向かった場所であったということも知り、大国に翻弄され続けたチェコの歴史がダブった記憶があります。
今、また核大国ロシアがウクライナを踏みにじる悪行を働いています。私は一市民として可能な平和のとりくみを探りつつ生活したいと思います。そしてヒトラーやスターリンまた米国のベトナム侵略に見るように侵略者、抑圧者は早晩退散せざる得ないと思い、その日が一日でも早くと願っています。

次回は8月22日(月)

会場：京都市北文化会館

A/Bとも　13：00開場　13：30～15：30

「サマーコンサート　打楽器アンサンブル」

打楽器　中山　航介　さん

中山　美輝　さん

打楽器は叩いて音を出す楽器！！手やバチ（木の棒）などを使います。オーケストラでは後ろで頑張ってる楽器たちです。
８月は、打楽器の魅力をたっぷりお楽しみいただきます。